
いつまでも、彼女だよ

光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつまでも、彼女だよ

【Nコード】

N9245V

【作者名】

光

【あらすじ】

桜の花が舞い散る四月。

桜井知恵は小6になり、元気に学校に通っていた。

ある日、知恵もクラスに男子生徒が転校して来た、その子の名前は嶋田光輝しまだみつてると言う。

光輝は父親の仕事の関係でこの町に引っ越して来たと言う担任の紹介が終わり、光輝の自己紹介が終わると担任が光輝に席を与えた、その席は知恵の隣の席で光輝は返事をして席の方に歩いて来て知恵

に笑みを浮かべ。

「よろしく、なかよくしようね」

「こちらこそ」

その顔を見た時、キュンと胸が締めつけられる感じがした。

その後、光輝を見るたび、胸が締め付けられる感じは増して行き話す事も出来ずにいた。

学校では、男子生徒に告白するのが流行っていて光輝に告白する女子生徒もいたが、全員「好きな子が、いるから」と全滅、はたして光輝の好きな子は？

1 キュン

朝7時、目覚ましがなり知恵は目を覚まし、部屋を出てリビングへ行き母親に。

「おはよう」

座ると、キッチンから朝食を持って来てテーブルの上に置くと。

「いただきます」

食べ始め全部食べ、部屋に行き着替え。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩きクラスメイトの坂本香織さかもと かおりの家の前を通った時、香織が出て来ると。

「おはよう、香織ちゃん」

「おはよう、知恵」

挨拶を交わし、学校に向かい校門を潜り教室に行き机の中に授業道具を入れてクラスメイトと話していると。

キンコーンカンコーン、キンコーンカンコーン。

教室に担任が入って来て、教壇に出席簿を置くと。

「え——え、今日はこのクラスに新しいお友達が来ているので紹介します」

すると、教室がざわめき出した。

「静かにして、して下さい」

怒り、生徒が黙ると廊下の方を向いて。

「じゃあ、入って来て下さい」

すると、1人の男子生徒が入って来て教壇の前に立つと、担任がホワイトボードにその生徒の名、嶋田光輝と書くと光輝の後ろに立ち。

「えー、嶋田くんはお父さんのお仕事の関係で、この町に引っ越して来ました、まだこの町の事がわからないと、聞かれたら教えてあ

「げて下さいね」

「はい」

返事をする、肩をポンと叩き。

「じゃあ、嶋田くん一言、お願いします」

「は・初めまして嶋田光輝です、よろしくお願いします」
ペコリと頭を下げると、拍手がわき担任が。

「桜井さん」

知恵を呼んだ。

「はい」

返事をする、担任が光輝に。

「嶋田くん、あの子の隣の席に座ってくれるかな？」

「はい」

頷き、席の方に歩いて来て笑みを浮かべ知恵に。

「よろしく、なかよくしようね」

「こちらこそ」

顔を見た時、キュンと胸が締めつけられる感じが。

（何、この感じ？）

光輝が座ると、出席を取り授業を始めた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると香織が来て。

「知恵、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩いて香織の家の前で。

「宿題しようよ？」

「うん、いいよ、じゃあ」

別れ、家に帰ってランドセルの中から宿題を出し手提げ入れ、家を出て自転車に乗って香織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き香

織が顔を出し。

「いらつしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入るとテーブルの上にジュースが出ていて座り宿題を始め1時間後。

「終わった」

香織は宿題を閉じ。

「知恵は？」

「あと、1問」

残りの問題をノートに書き。

「終わったよ」

ジュースを飲み終え。

「私、帰るよ、じゃあ」

「バイバイ」

香織の家を出て、家に帰って部屋でマンガ本を見ながら、朝の出来事の事を考えた。

「あれって、何だったんだろう？」

考えたが、わからず。

「ま、いいか」

また、マンガ本を見出した。

2 案内

光輝が転校して来て、3週間が過ぎようとしていた。

光輝は頭が良く、スポーツ万能でクラスの女子の間で人気者になっ
つていて、毎日、光輝の周りには女子生徒がいて話はずんできた、
知恵はあれ以来、光輝の顔が見れず。しゃべる事すら出来ずにいた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で香織に逢い。

「おはよう、香織ちゃん」

「おはよう、知恵」

挨拶を交わし、教室に向かって歩いていると背後で。

「おはよう」

光輝の声がして、振り向き。

「おはよう、嶋田くん」

香織は挨拶したが、知恵は胸が締め付けられる感じがして何も言
えなかった、3人は教室に行き授業を受けた。

放課後。

知恵がランドセルの中に授業道具を入れていると香織が来て。

「知恵、帰ろう?」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩きながら。

「ねえ、知恵」

「うん、何?」

「知恵って、嶋田くんのこと、避けてるの?」

「別に避けていないよ、何で?」

「だって、嶋田くんと話しているところ見ないし、今日だって何も

言わなかったから避けてるのかなって思って」

「別に避けていないから」

下を向き。

（嶋田くんを見ると、胸が締め付けられる感じがするんだもん）
答えると。

「ごめん、勘違いだったみたいね、本当にごめんね」

「ううん、いいよ」

歩き、香織の家の前で。

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰る道を歩きながら。

（なんで、嶋田くんを見ると胸が締め付けられる感じがすんだらう？ 他の男子を見ても平気なのに）

家に帰り、部屋で宿題をして小さくなった消しゴムを見て。

「宿題が終わったら買いに行こう」

数十分後。

「終わった」

ノートを閉じて。

「買い物に行こう」

財布を持って家を出て、自転車に乗って文房具店に向かった。

文房具店に向かう途中で、キョロキョロしている光輝が見えた。

（どうしたんだらう？）

光輝の所に行き。

「嶋田くん、どうしたの？」

「あっ！ 桜井さん、文房具店ってどこにあるか、教えて」

「いいよ、私、今行くから一緒に行こう」

2人は、文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降りて店内に入り知恵は消しゴムを光

輝はノートを持ち、レジに行き支払いをして、店を出た時。

「桜井さん、ありがとう、助かったよ」

礼を言われた時、今まで締め付けられていた胸が温かくなったのを感じ。

（なんか、違う）

胸を押さえていると。

3 好きな子

5日が過ぎた。

文房具店の事以来、光輝と話が出来るようになった。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で光輝に逢い。

「おはよう、桜井さん」

「おはよう、嶋田くん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「嶋田くんって、どういう番組を観るの？」

「お笑いとかかな」

答えると。

「じゃあ、昨日のお笑い観た？」

「うん、観たよ、面白かったね」

「うん」

話しながら教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、クラスメイトの反町史恵が光輝の前に来て赤い顔をして。

「し、嶋田くん、ちよつといいかな？」

「うん」

教室から出て行き、知恵も香織と教室を出た。

次の日

担任がボードに問題を書き。

「じゃあ、この問題を嶋田くん解いて下さい」

「はい」

席を经ち、ボードに書いてある問題を解くと、担任が生徒たちに。

「これで、合っているかな？」

「合ってます」

声を合わせて言う。

「ありがとうございます、戻っていいですよ」

座ると、説明をしながら授業の続きをした。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると香織が来て。

「知恵、帰ろう？」

「うん」

教室を出て、廊下を歩いていると文恵たちとすれ違いざまに会話が聞こえた。

「昨日ね、私、嶋田くんに告白したんだけど、好きな子がいるんだってさあ、誰、なんだろうね？」

「本当、誰、何だろうね」

学校を出て行った、2人も学校から出て帰り道を歩いて香織の家の前で。

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰る道を歩きながら。

（嶋田くんの好きな人って、誰、なんだろう？）

考えながら帰った。

4 告白

放課後。

知恵がランドセルの中に授業道具を入れてっていると香織が来て。

「知恵、帰ろう?」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩きながら。

「ねえ、知恵」

「うん、何?」

「なんか、最近、嶋田くと話しているみたいだけど、何かあったの? 最初は全然だったのに、どうして?」

「最初の頃は、嶋田くを見ると胸が締めつけられる感じがしてたんだけど、でもこの前ね、文房具に案内して別れ際に「ありがとう」ってお礼を言われた時、今まで締めつけられる感じが、なんか胸の中が温かくなるかんじがしたの、なんでかな?」

首を傾げながら言っていると。

「それって、恋って奴だよ」

「恋・・・?」

雑誌やテレビでよく聞く言葉だ。

「この間、お姉ちゃんを買っている雑誌に、そういうの書いてあつて、その人に好きですって告白すると、もっと胸の中が温かくなるんだって書いてあつたよ」

「えっ! そんなの言えないよ」

「だって、嶋田くと話していると、胸が温かくなるんでしょ?」

「う、うん」

頷くと。

「それだったら、言ったほうが、嶋田くんモテるから、早く言わないと他の子と付き合っちゃうかもよ」

「そんなの、イヤ」

「だったら、言うよ」

歩き、香織の家の前で。

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰る道を歩きながら。

（言えるかな？）

ちよつと、不安になった。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で光輝に逢い。

「おはよう、桜井さん」

挨拶される時、また胸が締め付けられる感じがして、光輝の元から逃げるように去り、廊下を歩いていると背後から香織が来て。

「おはよう、元気ないね、どうしたの？」

聞かれ、光輝に逢った時の事を話すと。

「大丈夫だよ、いつもみたいに話せば」

肩をポンと叩かれ、教室に入って授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れている光輝を見ながら。

（よしっ！）

心の中で気合を入れ。

「ねえ、嶋田くん」

「何、桜井さん」

聞かれると、顔を赤くして。

「ち、ちよつと、話があるんだけど」

「いいよ、何？」

「ここじゃあ、ちょっと」

「じゃあ、場所、変えようか？」

「う、うん」

教室を出て、校舎の裏の桜の木の下で。

「話って、何？」

聞かれると、指をモジモジさせながら。

「わ、私、し、嶋田くんのす・・・」

言い出せずにいると。

「僕、桜井さんの好きだ」

いきなりの告白に。

「えっ！」

文恵に言っていた好きな子と言うのは知恵の事だったのだ。

「それで、僕と付き合ってもらえませんか？」

「いいよ、私も嶋田くんの事、好きだし付き合っても、よろしくねえ」

「こ、こちらこそ、よろしく」

教室に行き、ランドセルを背負い学校から出て、帰り道を歩き知恵の家の前で。

「ここが、私ん家なんだ、じゃあね」

「うん、じゃあ」

別れ、中に入りキッチンに行き、いつもよりご機嫌な声で。

「ただいま」

「おかえり、何か、いい事があつたの？」

「まゝね、ご飯、出来たら呼んでね」

部屋に行き、宿題を始め数十分後、母親の声がして部屋を出た。

5 初デート

2人が付き合い始めて、初めての金曜日。
「いつてきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で光輝に逢い。

「おはよう、桜井さん」

「おはよう、嶋田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

「桜井さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き知恵の家の前で。

「ねえ、桜井さん」

「何？」

「明日、どこかに遊びに遊びに行こうよ？」

「いいよ」

（これって、デートの誘い？）

答えると。

「じゃあ、？時に迎えに来るよ」

「うん、待ってるからね」

別れ、中に入った。

次の日。

？時に起きて部屋を出て、リビングに行き母親に。

「おはよう」

「おはよう、どうしたの？、こんなに早く休みの日はお昼近いのに」

「？時に友達と遊びに行くの」

朝食を食べ、部屋でお気に入りの服を着て光輝を待っていると。
ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ部屋を出て、玄関に行きドアを開けると光輝が立っでいて。

「おはよう、行こうか」

「うん」

家を出て、自転車に跨ると。

「ねえ、どこに行くの？」

聞くと、ポケットから映画のチケットを出し見せると。

「この、映画、観たかったんだ、早く行こう」

映画館に向かった。

映画館に着き、自転車を降りて受付けでチケットと料金を払い館内に入り、スクリーンから？列目に座るとブザーが館内に鳴り響くと、徐々に暗くなり真つ暗になるとスクリーンに映像が映り出した、2人が観ている映画は今、流行っているテレビアニメの映画で、作者が映画のために書き下ろした作品で、2人は真剣に観て2時間が過ぎ映画が終わると館内が明るくなり館内から出ると。

「お昼、ファミレスでいい？」

「うん」

自転車に乗り、ファミレスに向かった。

ファミレスに着き、自転車を降りて店内に入ると、お昼時なので大勢の人たちが食事をしていて2人がキョロキョロしていると、ウェイtresが来て。

「いらっしやいませ、何名さまですか？」

「2人です」

答えると、空いている席に案内され座ると。

「お決まりになりましたら、お呼びください」

立ち去って行くと、立てかけてあるメニューを見て選び始め数分後。

「決まった？」

「うん」

ブザーを押すと、ウェイトレスが来て。

「お決まりでしょうか？」

注文を取る準備にすると。

「じゃあ、桜井さんから、どうぞ」

「私は、チーズたっぷりハンバーグセットのごはんと生野菜サラダとレモンスカッシュで」

「じゃあ、僕はデミグラスハンバーグと生野菜サラダとコーラで、以上です」

注文し、注文を繰り返し頷くと。

「少々、お待ち下さい」

去って行き数十分後、料理を持って来て。

「お待ちどうさまでした」

それぞれの目の前に料理を置き、金額の紙がはさんであるプレートを裏にして置き。

「ごゆっくり、どうぞ」

去って行くと、食べて食休みをして。

「そろそろ、出ようか？」

「うん」

席を立ち、レジに行き支払いをして店を出て、自転車に乗って来た道を戻り知恵の家の前で。

「今日はありがとう、とっても楽しかったよ」

「僕も、楽しかったよ、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

6 謎の女の子

夏休みに入って5日が過ぎた。

涼しいうちに宿題をして、リビングで昼食を食べていると、電話が鳴り母親が出た。

「はい、桜井です、ちょっと、待っててね」

受話器を横に置き、知恵の所に来て。

「香織ちゃんから、電話よ」

「ふあゝい」

口の中の食べ物を飲み込んで、電話に出た。

「もしもし、何？」

「プールに行こうよ」、と言う誘いの電話で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切って、部屋に行きタンスの中から水着を出し、タオルと一緒に手提げに入れ家を出て、自転車に乗り香織の家に向かった。

家の前で、香織が待っていて。

「お待たせ」

「行こう？」

「うん」

市民プールに向かった。

市民プールに着き、自転車を降り受け付けで料金を払い更衣室で水着に着替えて更衣室から出て香織と合流すると。

「知恵、おっぱい、大きくなったんじゃない？」

「そうかな」

胸に手をあて、首を傾げると。

「やっぱ、彼氏が出来ると、大きくなるかな？」

「知らない、行こうよ」

外に出ると、夏休みなので大勢の人たちが水遊びをしていて2人も体操をして水の中に入って知恵が。

「冷たくって、気持ちいいーい」

言っている。

「それ——えっ」

水をかけ、濡れた顔を見て。

「あっはははあ」

笑っていると、水をすくい。

「お返し——い」

水をかけっこして遊んでいると、香織が。

「あっ！ 嶋田くん」

「どこ、どこ」

キョロキョロしていると。

「ウソだよ」

背後から抱きつき、重さに耐えられず水の中に沈み、水の中から顔を出しふくれ面をして。

「もーお」

「ごめん、ねえ、競走しようよ？」

「いいよ」

競泳専用ゾーンに行き。

「ヨーイ、ドン」

一斉に泳ぎ始め、先に反対側の壁に手がついたのは、知恵で水中から顔を出し髪の毛をバックにしている数秒後、香織も顔を出し。

「あいかわらず、速いね」

「まーね」

言っていると、また、香織が。

「あっ！ 嶋田くん」

「また、ウソでしょう？」

「ウソじゃないよ、ほら」

指差した方を見ると、光輝の姿が。

「本当だ！ 嶋田くん」

駆け寄ろうとした時、更衣室の方から見知らぬ女の子が光輝と仲良く遊んでるのを見て。

「あの子、誰？ 嶋田くんと仲いいみたい？」

「知らないよ、私、出るね」

プールから出て、更衣室に走って行き。

「待つてよ」

知恵を追った、服に着替え外に出て自転車に乗ると。

「次、どこ行く？」

「ごめん、宿題、しなくちゃあだから、バイバイ」

ウソをついて家に帰り、部屋に入りベッドに寝そべり。

「あの子、誰なんだろう？ あんなに楽しげな嶋田くんを見たの初めてだし、まさか？」

変な事まで考えてしまい。

「も——お、わかんない」

枕に顔をうずめた。

次の日。

光輝と一緒にいる女の子の事は全然わからず、雑誌を見ていると子機が鳴った。

「はい、桜井です」

相手は香織で、「ゲームを買いに付き合つてよ」と言う電話で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切り、財布を持って家を出て、自転車に乗って香織の家に向かった。

家の前で、香織が待つていて。
「お待たせ」

「行こう?」

「うん」

近くのゲームショップに向かった。

ゲームショップに着き、自転車を降り店内に入ると、香織はレジに行き予約券と料金を出しゲームCDを受け取ると、知恵の所に来て。

「帰ろう?」

「うん」

店から出た時、光輝と例の女の子が2人の前に来て。

「やあ、坂本さんに桜井さん」

知恵が香織の背後に隠れると。

「嶋田くん、その子、誰?」

「あつ! 紹介するよ、僕のしんせきで嶋田果歩しまた かほって言うんだ」

「えっ! しんせきの子」

驚いていると、果歩に。

「僕とクラスが同じ、坂本香織さんと桜井知恵さん」

紹介すると。

「こ、こんにちは」

頭を下げると、2人も。

「こんにちは」

会釈すると、香織の持っている袋を見て。

「坂本さん、何、買ったの?」

聞かれ、袋からゲームを出し。

「これ、買ったの」

「その、ゲーム、攻略本を買ってやった方が早くクリア出来るよ」

「そうなの、ありがとう」

礼を言い、知恵に。

「行こう」

「うん」

自転車に乗って本屋に行き、自転車を降り店内に入り攻略本を買って店を出て、来た道を戻り香織の家の前で。

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り部屋で雑誌を見ていると子機が鳴った。

「はい、桜井です」

相手は、単身赴任中の父親だった。

「うん、元気だよ、うん、言っとくね、バイバイ」

電話を切り、部屋を出てキッチンでジュースを飲んでいると、母親が買い物から帰って来た。

「パパ、明日、帰って来るって」

「そう、今から、夕飯の用意するからね」

キッチンで、夕飯の用意を始めた。

7 帰って来たパパ

今日は半年ぶりに父親が帰って来る日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で香織に逢い。

「おはよう、香織ちゃん」

「おはよう、知恵」

挨拶を交わし、ニコニコしながら校庭を歩いていっていると。

「何か、いい事、あったの？」

「うん、今日ねえ、パパが帰って来るの」

嬉しそうに言う。

「知恵は、パパ好きだから、よかったね」

「うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

「桜井さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き知恵の家の前。

「ねえ、CD、買いに付き合ってよ」

「いいよ、待っててね」

中に入り、部屋に入りランドセルを置き家を出て、自転車を転がし光輝の家に向かった。

数分、歩き、大きな家の前で。

「ここが、僕ん家、ちよつと待ってて」

中に入って数分後、出て来て。

「行こうか？」

「うん」

近くのCDショップに向かった。

CDショップに着き、自転車を降りて店内に入りCDを選び始め、手にしたCDは知恵

が好きなアーティストのCDで。

「嶋田くん、そのアーティスト、好きなの？」

「うん」

「私も、このアーティスト、好きなんだ」

「そうなの」

レジに行き支払いをして店を出て、自転車に乗って来た道を戻り光輝の家の前で。

「一緒に、聴こうよ？」

「うん」

上がり部屋に入ると、ノートパソコンが置いてあった。

「好きな所に、座って」

「うん」

座ると。

「ジュース、持って来るね」

部屋を出て行き数分後、缶ジュースを持って来て。

「はい」

「ありがとう」

飲み始めると、買って来たCDをパソコンにセットしてプレイボタンを押し曲が流れて来て終わると、いろいろな曲を聴いて1時間が過ぎ。

「私、そろそろ帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、自転車に乗り知恵の家に向かい、家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ると玄関に見慣れた靴が脱いであり急いでリビング
に行く、そこには半年見る父親の姿があった。

「知恵、おかえり」

「パパこそ、おかえり」

「ただいま」

ニコツと笑みを浮かべ言っていると、母親が。

「夕飯、どうする？」

言っていると、父親が。

「たまには、食べに行こうか？」

「わーい、行く、行く」

その夜、ファミレスに行った。

8 運動会

？月に入り、今日は運動会。

「いつてきます」

体育着で外に出て、学校に向かい校門の所で光輝に逢い。

「おはよう、今日はガンバロウねええ」

「うん」

教師たちと体育委員が、最終チェックしている姿を見ながら教室に行くと、女子たちが一ヶ所に集まっいて。

「どうしたんだらう？」

心配になり中に入って行くと、そこには足に包帯を巻いた香織が痛々しい姿をして座っいて。

「ど、どうしたの、その足？」

「昨日、お姉ちゃんとリレーの練習をしてて捻挫しちゃった、最後の運動会なのに」

残念がつっていると、女子たちが。

「どうする、香織の代わり？」

話していると、知恵が。

「私が香織ちゃんの番も走るよ」

「いいの、知恵」

「うん」

頷くと、出走表の香織の名の所に知恵の名が書かれ数分後、担任が来て出席を取り。

「じゃあ、外に出て下さい」

担任の指示で、外に出て開会式が行われ終わると1年生を残し昨日、出して置いた椅子に座り短距離走を観て数十分後、6年生の短距離走の時間になり行われる場所に行き、第一走者がスタートラインに立つとスターターの教師がピストルを鳴らすと一斉に走って行

きゴールをして次々と走って行き光輝の番が来て、ピストルが鳴り一斉に走り出し1位でゴールして男子が終わると、女子の番になり次々に走って行き知恵の番になり、ピストルの音と共に走り出して2位でゴールをして全員走り終え戻って、1年生の大玉転がしと2年生の玉入れを観て午前の部が終わって、それぞれの教室で軽い食事をして食休みを取っていると、チャイムが鳴り外に出た、午後は1年生と2年生が帰ったので3年生の対抗リレーから観て数十分後、6年生の対抗リレーの時間になり校庭の真ん中に行き走る順に並んで第一走者に各クラスにカラーバトンが渡された、知恵のクラスは4組なので白のバトンが渡されスタートラインに立つと、スターターの教師がピストルを鳴らすと一斉に走り出した、順位は2組、1組、4組、3組で行われていて？走者目で4位になってしまったが、？走者目で2位になりアンカーの光輝に渡されると、1位を走っている1組を追いかけて行き最後の直線で抜きゴールをすると男女は喜んだ、続いて女子の番なりピストルが鳴らすと走り出した4組は最下位を走っていたが？走者目で3位なって知恵の1回目の出走、高橋恵子からバトンを受け取り、3位を走っている3組を追いかけて行き3組を抜き2位で佐伯和美にバトンを渡して校庭の中で息を整えていると、女子たちが来て。

「大丈夫？」

「うん、平気だよ」

言っていると、佐々木幸子が1位を走ってる2組を抜いて1位になり知恵の2回目の出走、スタートラインに立ち横を見ると6年の女子の中で一番速いと言う1組の川井加奈が立っていた、横山沙紀からバトンを受け取り走り出し第2カーブでスタート地点を見ると加奈が走り出す所で知恵はペースを上げ走っていたが最後の直線で抜かれてしまい2位でアンカーの松野智子にバトンを渡し中に入り女子たちに。

「ごめん、抜かれちゃった」

「しょうがないよ、川井さんじゃあ」

言っていると、友子が3組を抜き1位でゴールすると男女は大喜びした、これで男女共に一位と言う好成绩で終わり、全生徒でフォークダンスを踊って閉会式で4組には2つの優勝カップと賞状が送られ運動会は終わって担任の指示に従い教室に戻り、担任を待っているカップと賞状を持って来て教壇に置き。

「今日はおめでとう、みんなでバンザイをしましょう」

生徒たちが立つと、担任と生徒たちは。

「バンザイ、バンザイ」

2回あげ、拍手をし。

「じゃあ、今夜は早く寝て、あさって元気な顔で逢いましょうね
日直さん」

「礼」

頭を下げると、担任は出て行き。

「桜井さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き知恵の家の前で。

「明日、遊園地に遊びに行こうよ？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、？時に迎えに来るよ」

「うん、待ってるからね」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、今日、凄かったね」

「うん、まゝね」

部屋に行き、雑誌を見ていると「初めてのキス」と言うタイトルの読者の手紙を紹介するコーナーが載っていて見ていると、中学1年生の女の子の体験談が載っていた。

（あれは、彼氏との2回目のデートの時でした。

遊園地に行き、いろいろな乗り物に乗って最後に観覧車に乗った時、彼氏が唇を近づけて来たのでキスをしました、その時、甘酸っぱい

レモンの味がしました・・・）

「へーえ、キスつて、レモンみたいな味がすんだ、私も嶋田くんと・
・」

想像しただけで、顔が赤くなつてしまい。

「やだーあ、想像しただけで、赤くなつちくなつちやつた」

9 初めてのキス

次の日。

お気に入りの服を着て、光輝を待っていると。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、部屋を出て玄関に行きドアを開けると光輝が立っていて。

「おはよう、行こうか？」

「うん」

家を出て、自転車に乗り遊園地に向かった。

遊園地に着き、自転車を降り受付けで料金を払いパンフレットをもらい、園内に入って。

「桜井さん、何から乗る？」

「うんとね」

パンフを見て数十秒後。

「これに、乗りたい」

指をさしたのは、遊園地で一番人気のアラジンの魔法のじゅうたんと言う絶叫マシンで、

その場所に行くと数十人の列が出来ていて。

「これじゃあ、待たないとだから、違うのに乗りに行こうよ」

また、パンフを見ていろいろな乗り物に乗って数十分後。

「そろそろ、行ってみようか？」

「うん」

先ほどの場所に行ってみると、人が並んでいなく直ぐ番が来て2人は先端に座ると体が固定され、静かに動き始め徐々に動きが激しくなり一緒に乗っている人たちが声を上げ、知恵も一緒になって声を上げ楽しんでいると、じゅうたんは回転を始めて5回の回転をし

て静かに元の位置に戻って降りると。

「声、出したら、喉かわいちゃった」

「じゃあ、ジュースを買って来るから、ベンチに座っててよ」

「うん」

近くのベンチに座って待っていると、ジュースを買って来て。

「はい」

「ありがとう」

飲んでいると、頭の中に（観覧車の中で・・・）と昨日、読んだ雑誌の文を思い出し。

「ねえ、嶋田くん、観覧車に乗ろうよ？」

「うん、いいよ」

観覧車がある方に行くと、ちょうどゴンドラが来ていて、それに乗り込むと上昇して行き光輝は外を見ながら。

「どんどん、人が小さくなっていく、僕たち巨人になったみたいだね、ハハハ」

喜んでいる姿を見ながら。

「ねえ、嶋田くん」

「うん、何？」

聞かれると、赤い顔をしながら。

「キスって、レモンみたいな味がすんだって、してみようか？」

「えっ！ う、うん」

頷き、知恵が目を閉じると肩に手を置き唇をかさね数秒で離し。

「味、しないね」

「うん」

「でも、なんか、体が熱くなったね」

「そうだね」

その後、下に着くまで会話は無く降りると。

「お昼、食べに行こうよ」

「うん」

遊園地から出て、自転車に乗ってファストフード店に向かった。

ファスト店に着き、自転車に降り店内に入りカウンターに立つと、女性店員が。

「いらっしゃいませ、こちらでお召し上がりでしょうか？」

「はい」

頷き。

「僕は、WチーズとポテトのMとコーラのSで、桜井さんは？」

「私は、チーズとオレンジのSで」

注文し、食材をトレイに載せてもらい空いている席に座り食べて。

「そろそろ、出ようか？」

「うん」

トレイを戻して店を出て、自転車に乗り来た道を戻り知恵の家の前で。

「今日は、楽しかったよ」

「よろこんでくれて、うれしいよ、じゃあ」

「うん、バイバイ」

？ 誕生日

？月に入り、今日は知恵の？歳の誕生日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で光輝に逢い。

「おはよう、桜井さん」

「おはよう、嶋田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

香織と佐伯和美と佐々木幸子と高橋恵子と横山沙紀を誘い、ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「桜井さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て帰り道を歩き知恵の家の前で。

「ねえ、嶋田くん」

「うん、何？」

「今日、私の誕生日なんだ、それで7時からパーティをすんだけど、来てくれる？」

「うん、わかったよ、じゃあ」

「じゃあ、待っているからね、バイバイ」

別れ、中に入ってキッチンに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

冷蔵庫から、ジュースを出し飲んでいると。

「今夜、何人、来るの？」

「6人だよ」

答えると。

「じゃあ、お料理、たくさん作らなくっちゃね」

「お願いね」

部屋に行き、宿題をして雑誌を見始めた。

7時？分前。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ部屋を出て、玄関に行きドアを開けると香織たちが立っていて。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋の前で。

「中で待ってて、ジュース持って来るね」

キッチンに行つて、冷蔵庫からジュースのボトルを出していると母親が料理を作りながら。

「誰か、来たの？」

「香織ちゃんたち」

答え、人数分のグラスを出しお盆に載せて部屋に行き、グラスに注ぎ目の前に出すと。

「ありがとう」

飲んでいると、子機が鳴った。

「何？」

用意が出来たと言う電話で。

「わかった」

電話を切つて、5人に。

「用意が出来たって、行こう？」

部屋を出て、客間に行くとテーブルの上には沢山の料理が出ていて、中央に大きなケーキが置いてあつて座ると、父親がライターで火をつけようとした時。

「待ってよ、もう1人来るから」

「そうか」

ライターを置き、数分後。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光輝が立っている。

「遅れて、ごめん」

「いいよ、上がって」

「おじゃします」

上がり、一緒に客間に行き隣に座らせると。

「パパ、いいよ」

ロウソクに火をつけ、母親が電気を消すとバースデーソングを歌い火を吹き消すとパーティは始まって数時間が経って

「知恵、私たち、帰るよ」

5人が立つと、知恵は玄関まで送り。

「今日は、ありがとうね」

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

香織たちが帰ると、客間に残り残りのケーキを食べていると。

「桜井さん、僕も帰るよ」

立ち上がると、玄関まで送ると。

「そうだ」

ポケットから紙袋を出し。

「はい、誕生日プレゼント」

「ありがとう」

受け取り、光輝が帰って行き部屋にプレゼントを置き、片付けを手伝い部屋に行き下着を持ってバスルームに行きシャワーを浴び、部屋に行き紙袋の中の取り出すと、光輝と同じキーホルダーでランドセルの横に着けてベッドに入った。

？ クリスマス会

今日は、クリスマス。

朝食を食べて、部屋で雑誌を見ていると電話が鳴った。

「はい、桜井です」

相手は香織で、「クリスマス会で呼ぶ人を決めよう」と言う電話で。

「わかった、今から行くね」

電話を切って家を出て、自転車に乗って香織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、ドアが開き香織が顔を出し。

「いらつしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入り。

「でさあ、誰、呼ぶ？」

「うんとね、和美ちゃんと恵子ちゃんと沙紀ちゃんとさっちゃん（幸子）で、いいよ」

決めると。

「男子は？」

「香織ちゃんが、決めてよ」

「じゃあ、加藤さんと佐々木さんと竹井くん、それに嶋田くんかい？」

「うん」

頷くと、それぞれの家に電話をかけ、残すは光輝で。

「嶋田くんは、知恵が呼びに行つてよ？」

「うん、じゃあね」

香織の家を出て、自転車に乗り光輝の家に向かった。

家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、ドアが開き光輝の母親が出て来て。

「桜井と言いますけど、光輝くんはいますか？」

「ちよつと、待ってて下さいね」

ドアが閉まり数十秒後、ドアが開き光輝が顔を出し。

「桜井さん、どうしたの？」

「今夜、クリスマス会をすんだけど、来れる？」

「うん、大丈夫だよ、何時？」

「7時に、家に来てよ」

「わかった、じゃあ」

別れ、家に帰り中に入ってキッチンに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり、今、ご飯の用意するから」

「いいよ、夜、香織ちゃん家でクリスマス会をするから、いらないよ」

部屋に行き、昨日買った雑誌を見ていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ部屋を出て、玄関に行きドアを開けると光輝が立っていて。

「お待ちどう」

「行こう」

家を出て、自転車に乗って香織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、ドアが開き香織が顔を出し。

「いらつしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、客間に行くと皆いて。

「じゃあ、始めようか、グラス持って」

全員がグラスを持つと。

「メリークリスマス、かんぱーい」

グラスを軽く合わせ、パーティーは始まり数時間が過ぎ加藤が。
「坂本、俺たち帰るよ、じゃあな」

男子たちが帰り数分後、女子たちも帰り。

「香織ちゃん、私たちも帰るよ、じゃあね」

「うん、バイバイ」

香織の家を出て、自転車を転がし知恵の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

？ 新しい年

日は経ち、新しい年を迎えた。

部屋を出て、リビングに行き父親に。

「あけまして、おめでとうございます」

「おめでとう、はい、お年玉」

お年玉袋を差し出すと。

「ありがとうございます」

受け取り、部屋で袋の中を見ると5千円札が入っていて貯金箱に入れていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ部屋を出て、玄関に行きドアを開けると香織と和美と恵子と沙紀と幸子が立っていて。

「おめでとう、初詣に行こうよ？」

「うん、待ってて」

ドアを閉め、部屋に行き財布を持って家を出て、自転車に乗って近くの神社に向かった。

神社に着き、自転車を降り境内に行くと大勢の参拝者が来ていて、6人は賽銭箱をお金を投げ入れ願い事をした、知恵は これからも、嶋田くんの彼女でいれますように と強く祈り、その場を去り出店で食べ物を買って自転車置き場に行き自転車を乗った時、光輝が来て。

「桜井さん、おめでとう」

「おめでとう」

光輝は自転車を降り。

「桜井さんたちは、もう、お参りしたの？」

聞かれ、6人が頷くと。

「ちよっと、待っててよ、僕、行って来るから」

言い、境内に走って行くと、香織が。

「ごめん、私たち用事があるから帰るからって行っというて、じゃあね」

「うん、バイバイ」

香織たちが帰って行き、光輝を待ちながら。

（嶋田くん、どんな、お願いするんたろう？）

待っていると、光輝が戻って来て。

「あれ、坂本さんたちは？」

「用事があるんだって」

「そうなんだ、じゃあ、家来る？」

「うん、行く」

自転車に乗り光輝の行く途中、コンビニに寄ってお菓子を買って家に行き部屋で音楽を聴き数時間が経ち。

「私、帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、自転車を転がし知恵の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ると見慣れぬ靴が2足あってリビングに行くと、父親の兄夫婦がお年始に来ていてお酒を飲んでいて。

「伯父さん、あけましておめでとうございます」

新年の挨拶をすると、お酒を一口飲み。

「はい、おめでとう、そうだ、おい」

奥さんに言くと、バックからお年玉袋を出し。

「はい、知恵ちゃん、お年玉」

「あ、ありがとうございます」

受け取り、部屋で袋の中を見ると1万円札が入っていて貯金箱に入れて、雑誌を見始めた。

？ バレンタインデー

2月に入り、明日はバレンタインデー。

放課後。

学校から出て、帰り道を歩いて香織の家の前で。

「ねえ、チョコ買いに行こうよ？」

「うん、いいよ、じゃあ」

別れ、家に帰り中に入って財布を持ち家を出て、自転車に乗り香織の家に向かった。

家の前で、香織が待っていて。

「お待たせ」

「行こう？」

「うん」

スーパーに向かった。

スーパーに着き、自転車を降り店内に入りチョコの売り場に行く
と女の人たちがチョコを買っていて、2人はチョコを持ってレジに
行き支払いをして店を出て、自転車に乗って来た道を戻り香織の家
の前で。

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰った。

次の日。

「いってきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で光輝に逢い。

「おはよう、桜井さん」

「おはよう、嶋田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

「桜井さん、帰ろう？」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き知恵の家の前で。

「ちよっと、待ってて」

中に入り、冷蔵庫からチョコを出し家を出て、赤い顔をして。

「はい、チョコ」

「えっ！ くれるの？ ありがとう」

受け取り。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

？　いつまでも、彼女だよ

3月に入り、今日は卒業式。

中学のスカートをはいて。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい校門の所で香織に逢い。

「おはよう、香織ちゃん」

「おはよう、知恵」

挨拶を交わし、校門をくぐろうとした時。

「ここを、くぐるの最後だね」

「そうだね」

話しながら、廊下を歩いていると背後から光輝が来て3人が教室に行き数分後、背広を着た担任が来て最後の出席を取っていると、5年生たちが入って来て卒業生たちの胸に「ご卒業おめでとうございます」と書かれた札をつけ、教壇の前に横一列に並んで代表の男女が。

「今日はおめでとうございます、中学校に行っても勉強と運動にガンバって下さい」

頭を下げ出て行き数分後、スピーカーから。

「卒業生は、体育館に集まって下さい」

声が流れ、担任の指示に従い体育館に行き並べであるパイプ椅子に座ると、教頭先生が。

「只今より、〇〇小学校、卒業式を始めます、始めに校歌斉唱、一同起立」

校歌を歌い、卒業式は始まり校長の話やPTA会長や来賓の人たちの話が終わり、卒業証書授与式が始まり1組の担任が生徒の名前を呼ぶと大きな返事をして、校長先生の所に行き卒業証書をもらい席に戻り次々に呼んで行き、全卒業生に証書が渡り最後に卒業生か

在校生に歌を送り卒業式は終わり5年生の作ってくれた花のアーチをくぐって、それぞれの教室に戻って担任を待っていると、クラフト封筒を持った担任が来て。

「それでは、先生から最後のプレゼントを渡しますので呼ばれたら、取りに来て下さい」

生徒の名を呼ぶと、返事をして担任の所に行き通知表をもらい全員に渡ると。

「今日は、本当におめでとうございます」

ちよつと、涙声になりながら。

「君たちと、1年間、本当にいい思い出が出来た、中学に行っても思い出をいっぱい作って下さいね、それでは委員長、最後の号令をお願いします」

「礼」

全員が頭を下げると、担任は出て行き。

「桜井さん、帰ろう?」

「うん」

学校から出て、帰り道を歩き知恵の家が近くなった時、立ち止まった。

「桜井さん、どうしたの?」

「ねえ、私って中学に行っても嶋田くんの彼女かな?」

「僕は、桜井さんの事が好きだから、いつまでも、彼女だよ」
笑みを浮かべながら答えると。

「本当、うれしい」

ほほにキスをして、家に向かった。

おわり

？　いつまでも、彼女だよ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

光

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9245v/>

いつまでも、彼女だよ

2011年8月31日03時27分発行